小谷亀太郎氏 逝去

タイ国在住で善光寺留学僧育英会顧問、世界仏教徒連盟本部事務次長の小谷亀太郎氏が七月十三日、バンコク市内の病院で死去されました。八十五歳でした。

バンコク日本人会の理事をつとめ、昭和十年に同会が建立した日本人納骨堂の初代奉賛会会長として春秋の慰霊祭の世話をするなど日本人遺骨の慰霊に長く携わり、またバンコクに本部を置く世界仏教徒連盟（ＷＦＢ）の事務次長を三十年近くつとめて、開教師や留学生などタイ国を訪れる日本人僧の招聘に尽力されました。

タイ国在住の日本人として日タイ親善に尽くした最大の陰の功労者というべき存在で、日本からの留学僧の得度式に立ち会ったり、タイ国を訪れる僧俗の世話役を果たすなど有形無形に貢献され、慕われておられました。

近年は病床に臥し、腎臓透析を受けながら自宅療養を続けていました。

葬儀は喪主を夫人の久子さんがつとめ、七月二十二日にタイ国で執り行なわれました。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

弔辞

日本パクナム会会長
横浜善光寺留学僧育英会理事長
黒田武志

小谷会長さまとお呼び致します。

会長さま、残念です。とても悲しいことです。私が最も敬愛してやまない尊い会長さまの訃報に接し、唯々驚愕し、哀惜のことばすらみつかりません。

世界仏教徒連盟本部（W・F・B）事務次長、タイ国日本仏教会奉賛会々長、日本国横浜善光寺留学僧育英会顧問である故小谷亀太郎会長様の御霊前に、謹んで弔辞を捧げます。

会長さまとは、昭和四十年ワットパクナムに安居して以来、法縁を頂いておりました。

私は「宗祖を通して釈尊に還る」を念願し、大本山での修行を終え、インド仏蹟を巡拝、その帰国途次、縁あって石附周行師とワットパクナムに錫を留め、安居生活に入りました。今から三十五年前のことです。当時パクナムにはプ

ラパーワナコーソンテーラ副住職様や、佐々木弘傳先生、佐々井秀頴先生等が安居され、皆様「行」に励んでおいででした。そのとき、私共を親身になって一切のお世話を下さったのが会長様でした。

当時、勉強不足の私は、教義に疑問が多く悩み、苦しみ、どれが釈尊の正しい教えなのかわからず迷うておりました。はじめて上座部仏教にふれ、苦よりの解脱は僧伽にしかないと確信し修行の決心をいたしました。

いま、世界はあたかも一国の観を呈しておりますが、反面、人類はかつてない不安と絶望に見舞れております。今日ほど佛陀釈尊の教法宣伝布を必要とするときはないと感じております。

今日、大乗仏教と上座部仏教とが相互に理解し合い、交流をはかり、人材の育成、仏教の振興、世界の平和、人類の進運に益々寄与せねばならぬとき、その要(かなめ)を失い、惜しみても余りあるものがあります。

私が世界に眼を開いたのも、解脱に近づくことが出来たのも、二二七の戒律をいただき、その守ることの尊さを知ることができたのも会長さまを介してワットパクナムの僧伽に過すことができたお蔭です。当時日々の糧は托鉢して供養を受ける。住む場所は木の下、清貧と簡易の「行」こそ解脱への道と教えて下さったのは会長さまでした。

会長さまは、タイ国の六十余年に亘り、百名を超える日本からの留学僧をお世話いただきました。その献身的ご貢献はことばに尽せぬ程大きく尊いものです。

いまこそ佛道への堅固な菩提心と人種民族の枠を超えた弘法救生の慈悲をお説き下さった会長さまの存在がなくてはならないときであったのに。……

私には忘れられないことがあります。十年前、

十一面觀音像

横浜善光寺で私の子供四人の上座部仏教の得度をいただいたことであります。当日列席者の挨拶の中に、東大名誉教授中村元先生から、「これは有史以来全くはじめてのこと、仏法の国際交流にとって、意義深いことだ」と、ことばをいただいたことも、今日、タイ上座部仏教と交流を深くしていることも、その実現に深く、厚くご尽力下さった会長さまのお蔭です。又、その頃『宗教と現代』誌に、東隆眞博士も「タイ国の高僧が日本までおいでいただき、戒師となり、日本人のために授戒されたということは、おそらく中国の高僧鑑真和上が東大寺戒壇院を建て、日本人僧に授戒して以来のことであるまいか。ここに日本タイ両国の仏教史（戒律史）上新しい一ページが書き加えられることになった。」と述べておいでした。

「念ずれば花開く」といわれますが、会長さまが念願し待ち続けた日本ワットパクナム別院も二〇〇一年二月に本堂の完成も間近かです。その開山の式典に居なければならなかった小谷会長でした。悔まれます。

過日、善光寺留学僧吉田日光、私の愚息三男博志、又私の弟子智昭の得度式の節は、先づ小谷会長さまにご報告をと九名の参列者がお訪ね致しましたが、遂にお見舞叶わず、そんな中、奥様のご臨席を賜わり、身に余る尊い儀式と黄衣をいただくことができました。これ全て小谷会長さまのお蔭であります。

生者必滅、会者定離とは申せ、あまりにも早いお別れとなりました。会長さまが、私達にお与え下さいました慈悲心を心に深く刻んで、今後一層、日タイ友好親善に精進をいたす覚悟でございます。

会長さまの長きにわたるご貢献とご功績をたたえつつ、御冥福を祈り、哀悼の言葉を捧げ弔辞といたします。どうか安らかにお眠り下さい。